

書評『寄生獣』

一

この本のテーマについてですが、最初、地球のだけれが、ふと人間の数が半分になればいいなんて書いてあります。このように現代社会の人口過剰だとか、それに伴ってもたらされる環境破壊などが主要なテーマになっています。そこに登場してきたのが人間にとって驚異となる寄生獣Ⅱパラサイトです。彼らは人間を乗っ取り、「この種を喰い殺せ」という本能の呼びかけに従って人間を喰い始めます。こういった光景を人間の眼（まなこ）で眺めると、それはもう一方的な殺戮としか思えなくなるでしょう。しかし、度々登場する殺人鬼・浦上などが象徴しているように、寄生獣の本能的な行為は彼ら自身にとつての生命の再生産にほかならないのであって、実は生命全体というダイナミズムの中で見れば、案外調和の取れた在り方なのかもしれないのです。

人間中心（ヒューマニズム）VS環境中心（エコロジー）などという二大対立を持ち出してくるほど大層なことではないかもしれませんが、あたかも自分こそが、この社会の主人であるなどと思い上がっている人間の浅ま

しさに對して、寄生獸の存在は凄く示唆的だと思います。

二

物語の中で宇田さんが呼んでいるパラサイトというのは寄生虫という意味です。資料の中に人間の体内に寄生した条虫の写真がありますが、本来寄生虫と人間はもちつもたれつの関係にあると言います。だからこんな虫が体内にいても別段自覚症状が無かったりするわけです。いまベストセラーになっている『パラサイト・イブ』という小説はこの関係を逆手にとって、「ミトコンドリア」という人類古来からのパラサイトが人間に反逆するという恐怖を描いています。実際に医学部の学生らしい作者のリアリティーが物語を一層際立たせているのですが、それはともあれ「人間とパラサイトはあわせて一つだ」という田村玲子の言葉にもあるように、この『寄生獸』のテーマとして二つめに言えるのが「共生」ということなのではないかと思います。

田村とAはSEXをして子供を生みますが、その子は寄生獸ではなく人間でした。彼らは自らの種の保存を保障していく術をもたず、寄生した人間とともにその寿命を全うするしかありません。だから田村は「それのみでは生きてゆけないただの生命体だ」と言い、泉に「あまりいじめるな」と自分たちの無力さを告白するのだと思います。

パラサイトの中で最強の後藤が、破滅していく最後を見て泉は「殺したくない…そう思う気持ちが人間に残

された最後の宝じゃないのか」と呟きます。そして「他の生き物は誰ひとり人間の友達じゃないのかもしれない、でも……たとい得体は知れなくても尊敬すべき同居人には違いない」と悟ってしまいます。

The only one earth（かけがえのない地球）を守りたい気持ちはだれも同じだと思います。しかし森林資源や鉱物資源の乱伐が現に地球的規模で進行する環境破壊をもたらしている事実を忘れてはいけません。そしてそれは人間中心の文化・生活の維持を目的に成されているのだとしたら、「尊敬すべき同居人」としての他生物との共生などできるはずありません。



岩明均著「寄生獣」（講談社）